様式 6:終了時活動報告書様式

2023 年 12 月 18 日

世界の人びとのためのＪＩＣＡ基金活用事業 活動報告書

１．　業務の概要	
（１）事業名	トルコ在住シリア難民向け補習校における教育の質向上プロジェクト（チャレンジ枠）
（２）実施団体名	特定非営利活動法人 Piece of Syria
（３）実施期間	2022 年 12 月 1 日～2023 年 11 月 30 日
（４）実施国	トルコ
（５）活動地域	ガズィアンティップ

（６）活動概要

①活動の背景：

弊団体は 2019 年より、シリア国境近くのトルコ南部の町カズィアンティップにて、現地 NGO「Education Without Borders（以下、EwB)」と協力し、シリア難民向け補習校の運営支援を実施している。2011 年の戦争開始当初、トルコ政府はシリアの教育カリキュラムに準ずる形でアラビア語での教育を実施してきた。しかし戦争の長期化を受けてトルコ文化への統合を求め、アラビア語教育を禁止し、トルコの公教育を受けることを義務付けた。そこで EwB ではトルコ当局に補習校の活動の許可を得たが、先生の給与や運営費は拠出さ れなかった。そこでシリア事業でも関係のあった弊団体と協力し、人件費・運営費の補填に加えて、現地を訪れた日本人による体験授業の実施や、日本の子ども達とのオンライン交流を行ってきた。学校を諦めていた子ども達は、補習校に通い、トルコ語・アラビア語・算数・英語、心のケアを行うことで、99%の生徒が半年後に公立の学校に復帰している。

すでに実績を出してきた事業ではあるが、教育の博士号を持つスーパーバイザーを雇用し、３つの補習校における更なる教育の質の向上を目指している。現地の統計によるとトルコに住む 8 割のシリア人が、シリアに戻ることを希望していないという現状があり、補習校事業を通じてトルコ社会によりよく慣れることを目指している。一方で、トルコにおけるシリア人の状況は非常に不安定で、永住権を持っていないため、強制的にシリアに帰還させられる可能性もある。補習校での母国語のアラビア語、母国シリアの文化についての学習を行うことで、シリアへの帰国を余儀なくされた場合でも、シリアの復興・平和構築の人材となるような教育の土台を作ることを目指している。

②活動の目標：

戦争からの復興の経験を持ち、高い教育の質とその普及率を持つ日本の教育カリキュラムに対し、シリアの人々は非常に大きな尊敬の気持ちを持っている。そこで、トルコの補習校における教育の質の向上を目指し、専門家を通して技術提供と、EwB 教育プロジェクトマネージャーのウサマ・アッジャンの日本訪問を通して、日本のカリキュラム、教員研修制度、特別活動などの情報共有、ディスカッションを実施する。

２．　業務実施結果

（１）実施した内容

【実施内容①】岸磨貴子准教授とのミーティング、NGO 視察

明治大学・岸磨貴子准教授と EwB のウサマとオンラインでミーティングを実施し、1 年間を通じた目標設定を行ないました。ガズィアンティップの EwB の運営する補習校を訪問予定でしたが、2 月に起きた大地震を受けて、JICA 基金としてのトルコ渡航を断念しました。そのため、別途、岸准教授に依頼し、3 月に調査研究としてトルコのイスタンブールに渡航していただきました。イスタンブールでは、岸准教授及び EwB のウサマが、トルコ国内に避難するシリア人の教育支援を行う３つの NGO を訪問し、補習校の生徒と同じ立場にある子ども達の課題や効果的な取り組みを明らかにし、ウサマの日本研修の際に訪問する学校・NPO を選定するための参考としました。

【実施内容②】ウサマの日本研修

6 月 1 日～18 日、EwB からウサマが訪日し、様々な角度で日本の事例を学ぶ機会を作りました。瀬戸 SOLAN 小学校、津島農縁塾みんぱた、NPO 法人 FilC、NPO 法人三島子ども文化ステーション、Brainglish preschool、NPO 法人まなびと、関西大学初等部、関西大学・黒上ゼミ、広島大学・齋藤ゼミ、溝渕ゼミ、広島大学附属幼稚園、NPO 法人 ANT-Hiroshima、阿久比中学校、明治大学・岸ゼミ、CAMEL、NPO 法人さぽうと 21、上智大学・小松ゼミを訪問しました。

【実施内容③】日本研修の学びをシリアの先生達へ共有

日本での経験を伝えるワークショップを、EwB が運営するシリア国内の幼稚園、トルコの補習校でそれぞれ 2 回ずつ実施し、各 8 名の教職員が参加しました。その後、岸准教授とオンラインで最終ミーティングを行い、振り返りと助成期間終了後の展望について議論しました。

（２）実施成果

【実施内容①】岸磨貴子准教授とのミーティング、NGO 視察
「生徒のドロップアウト」の要因 4 つが明確になりました。
・学校教育を受けていない期間があり授業についていけない
・学校における教育学習文化の違い：言語の壁や文化・言語の違いによって生じる差別。
・シリア人児童生徒の社会資本の不足：学校で学ぶ抽象的概念と関連する具体的経験が少なく、理解を深めにくい。
・学習障害：特に境界知能（知能指数の分布において平均的とされる領域と知的障害とされる領域の境界に位置すること）の児童生徒は支援が必要にもかかわらず、認識されにくく、支援が得られないケースがある。

上記の要因を解決するために、本邦研修の目的を「プロジェクト型学習や探究学習を行っている学校」を視察すること、「多文化共生を専門とする明治大学の岸磨貴子研究室を訪問し、そのアプローチや方法を学ぶこと」と設定しました。

【実施内容②】ウサマの日本研修
シリア、トルコでは、シリア人の先生達の質の低下が問題になっており、教師をどうやってトレーニングし、授業をサポートするかが課題としてありました。そこで、子ども達が自分で考えるためのシンキングツールを用いた授業について学ぶ機会を得ました。また、他の先生の授業を定期的に、見学・フィードバックをする取組みを実施している事例を学ぶことができました。
シリアの幼稚園では、保護者の幼児教育への巻き込みが課題となっています。保護者がボランティアや講師としてセンターに関わったり、保護者向けの勉強会の実施について学んだりする機会を得ました。
身体表現やアート、そして体育を通じて、心のケアだけでなく、内面の成長、予防医学、認知能力の向上、人間関係づくり、身体と精神の Well-being、紛争解決、ピースビルディングという効果について学ぶ機会を得ました。
また、自然を使った遊具や読書習慣の促し方、子ども達の想像力を伸ばすための空間作りについて学びました。遊び・運動・自然を通じた体験型学習の価値を知ることができました。

【実施内容③】日本研修の学びをシリアの先生達へ共有
ウサマが日本滞在中に学んだことをシリア・トルコの先生達に、それぞれ 2 回にわたりワークショップで共有しました。
トルコの補習校スタッフ向けのワークショップでは、「日本では学生がディスカッションやグループワークで学んだことを発表すること」や「読書の重要性と効果について」等のテーマで発表とディスカッションを実施しました。
シリアの幼稚園スタッフへはオンラインで研修を行い、アートセラピーを通した心理社会的ケアの手法や、木の知育玩具を用いることの有用性などを共有しました。
トルコ、シリアどちらのスタッフからも、ウサマの報告からは新鮮な学びを受け、自分たちの教育活動にも活かしていきたい旨のフィードバックがありました。

（３）得られた教訓など：

シリアの人たちと話すと、「第二次世界大戦の後、焼け野原になった日本が、数十年で世界トップの経済大国となり、あんなに豊かに平和に暮らしているのはなぜなのか」と尋ねられることが多いです。今回、ウサマは訪日時にそれだけではない側面も見ましたが、それ以上に日本で実践されている、素晴らしい教育に関する取り組みを学ぶことができました。感動のあまり、説明の通訳を止めさせて「頭の整理が追いつかないから、整理させてほしい」ということも一度や二度ではありませんでした。

様々な場所を訪れて事例を見ることで、共通して話していることに気付くことができたり、大きな予算がある教育機関でやっていることのエッセンスは予算がなくても実践できる事例もある、ということに気付くことができました。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

キックオフミーティング時点では「退学予防や障がいを持った子ども達への対応」を目標にしていましたが、地震という予期せぬ事態の中で、心のケアの重要性が大きく上がりました。そこで「通常時に戻る」ことを最優先に取り組むことに重点を当て、他の NGO との意見交換をしながら事例を増やしていきます。まだ EwB は他団体との協働事業に力を入れていないため、私たちが関わることで橋渡しをしていくと共に、今後も引き続き、岸准教授が伴走し、実践を通じて学ぶ機会を作っていきます。

また、今回訪問した瀬戸 SOLAN 小学校の三宅先生とは、シンキングツールの活用を継続的に学ぶことに合意いただき、先生達向けトレーニングの際に活用できるよう、オンラインで学ぶ機会を作るため、連絡を取り合っています。

同じく訪問先の広島大学の齊藤教授からは「体を使ったワーク」の事例を、上智大学の小松教授からは「戦後の日本復興からの学び」を、助成期間後も教えていただく関係を作っており、活動をフォローしていきます。

３．その他(エピソード・感想・写真など)

（１）活動中のエピソード・感想など

帰国後にウサマが開催したワークショップに参加したトルコの補習校の先生から届いた「私は学級担任として、すべての教師が日本の学校を訪問し、もっと学ぶ機会があればいいのに、と思いました。まずは、子ども達に、日本についての本を読むように勧めます。そして、子ども達が日本についての学びを発表する機会を作ります」という感想が印象的でした。日本の学びを実際に訪れたウサマに留めるのではなく、しっかりと現場で活動するシリア人の教職員にも普及することができていると感じました。

（２）活動の写真

（瀬戸 SOLAN 小学校にて教室見学。その後、シンキングツールの解説を受ける）

（三島子ども文化ステーションを訪問。知育玩具や保護者の幼児教育への巻き込みを学ぶ）

（Brainglish preschool を訪問。多文化を学ぶ取り組みについて学ぶ機会を得た）

（広島大学附属幼稚園を訪問。子ども達が自然のなか自発的に遊び、学ぶ環境に感動）

（明治大学・岸准教授のゼミを訪問。アートや身体表現を使ったセラピーについて学ぶ）

（３）JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

JICA 関西の担当者が、関西大学・黒上ゼミの研究室訪問やウサマが登壇する報告会に足を運んでくださり、活動を見守ってくださったことで、一緒に活動を創る存在だと感じることができ、大変心強かったです。地震を受けて、予定していたことができなくなった際も、予算の活用方法について提案をしてくださったおかげで、柔軟に事業を遂行することができました。

ウサマ訪日に合わせて、幼稚園・保育園・小学校・中学校・大学・NPO・企業などの多くの場所を訪れました。それによって、団体として、今までの活動では繋がることができなかったような組織・人たちとの関係を構築することができました。

これを得て、今後団体の事業としては「教育を届ける」ことにとどまらず、今回繋がることができた教育の専門家の方々をアドバイザーとして、「教育の質」を高める活動に力を入れていきたいと考えています。

４． チャレンジ枠の伴走支援制度等について

（１）チャレンジ枠で事業を実施した率直な感想を記載ください。

法人化して間もない当団体にとって、貴基金に応募することはまさしく「チャレンジ」でしたが、事業を通して、確実に団体としてステップアップすることができたと感じることが出来た 1 年間でした。「シリアと遠く離れた日本の NGO が、なぜシリアの教育支援の活動をするのか」という問いに鮮明な答えができた事業の一歩目となりました。

当団体は、プロボノやボランティア中心の活動のため、スタッフが実際にトルコに渡航することは難しく、シリア人スタッフとの密なコミュニケーションの機会がなかなか取れないことも課題の一つでした。今回の事業を通して、日本で活動するほぼ全てのスタッフにとっても、初めてシリア人スタッフと話す貴重な機会になり、活動のモチベーションに繋げることができました。

そういった点でも、本当にチャレンジして良かった、と思える事業でした。

（2） 事業計画策定や業務進捗のモニタリング等の際に伴走支援者から受けた助言が本事業においてどのように役立ったか、具体的な事例があればご紹介ください。

当団体は、岸准教授と相談の上、伴走支援者をつけずに活動を実施しました。

伴走支援をつけない代わりに岸准教授にしていただいたことは、以下になります。

・訪日の目的設定
・訪日研修での訪問先の選定と紹介
・明治大学のゼミにお邪魔し、学生と共に実際のワークショップを体験する機会を作る
・振り返りミーティングの実施と継続的な伴走

（3） 上記 2 点を踏まえ、団体の成長となった部分や活動の成果、本事業を通じた学びや今後の方向性について記載ください

ウサマの帰国報告ワークショップを受けたシリア人の先生達のモチベーションが高まり、体験型学習やアートセラピーなど新しい取り組みが始まっている、という報告を受けています。

今後、団体としては、教育支援ではなく「日本の教育の知見を、シリアに届ける」という唯一無二の活動を通じて、広報・資金調達にもつなげていきたいと考えています。

これからも、シリアと日本の架け橋となり、より人びとにとってシリアが身近になることで、「シリアをまた行きたい国にする」というビジョンの達成を目指していきます。

以　上